

演題7 脂肪腫9例の臨床的検討

○岡村 悟, 伊藤 信明, 宮沢 政義
工藤 啓吾, 藤岡 幸雄, 武田 泰典*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座*

今回我々は、昭和44年6月から昭和55年9月までの11年3カ月間に当科で経験した9例の脂肪腫について、臨床的検討を行なったので、その概要を報告した。

性別では、男性3例、女性6例で、男：女比1：2と女性に多かった。その年齢は、3カ月から69歳までと広範囲におよんでいたが、40歳以上が7例で、平均年齢42.3歳であった。主訴は、腫瘍や腫脹が圧倒的に多く8例を占め、異和感を訴えたものが1例であった。発生部位は、頬部および頬粘膜部が5例と最も多く、舌、軟口蓋、臼後部、頸部が各1例であった。腫瘍の外形は、類円形のものが3例、卵円形が3例、円形が2例、有茎性ポリプ状が1例であり、全例も周囲組織との境界は明瞭であった。腫瘍の大きさでは、小鶏卵大の1例が最も大きく、次いで鳩卵大1例、雀卵大2例、示指頭大3例、小指頭大および小豆大が各1例であった。硬さは、弾性軟を呈したものが5例、弾性硬が3例、全体的に弾性軟であるが部分的に弾性硬を呈したものが1例であった。腫瘍を被覆する粘膜および皮膚の性状では、平滑なものが8例とほとんどを占め、潰瘍を形成したものが1例であり、色調は、正常色を呈したものが6例、発赤が3例であった。腫瘍を自覚してから来院するまでの期間をみると、6カ月未満のものが4例と最も多く、1年以上2年未満が2例、2年以上3年未満が2例、4～5年のものが1例であった。組織型では、単純性脂肪腫が8例と圧倒的に多く、線維性脂肪腫が1例であった。処置としては、治療を拒否した1例を除き、全例とも手術を施行していた。その内訳は、摘出が7例、切除が1例であった。術後経過は良好で再発例はみられていない。

演題8 歯根中央部に発生した水平破折の1症例

○安藤 良彦, 遠藤 正道, 久保田 稔

岩手医科大学歯学部保存学第一講座

Andreasenによると、歯根破折は、口腔外傷のうち

の1～7%に生ずるといふ。Grossmanは、歯根破折について、一般に破折位置が根尖側1/3以下ならば予後は良好であり、歯根の中央ないし歯冠側1/3で破折した場合には、予後は不良であると述べている。

今回、演者等は、27歳男子の上顎左側中切歯歯根中央1/3における破折に対し、受傷1週後に、エッチングのちエナメライトを両隣接歯との鼓形空隙に置く固定、受傷後約1カ月の時点で生じた冷水痛に対し抜髄およびGPポイントとチャンネルによる根管充填、および、固定後約2カ月でレジンが破壊したための再固定を行ない、その経過を、X線所見、臨床所見に基づいて述べ、さらに歯根破折の概要に対し若干の文献的考察を加え報告した。

受傷後9年4カ月を経過した現在、X線写真上で、破折片間の離開が見られるものの、周囲組織に異常な透影像は見られず、歯槽硬線も歯根全周にわたり明瞭に観察され、臨床的にならん支障なく機能している。

今回経験した根中央1/3における破折歯は、偶然に幸運な経過をたどったのにすぎないかも知れないが、このように10年近く機能している症例も存在したので、根中央1/3における破折においても、安易な抜歯は避けるべきであると思われる。

演題9 小唾液腺良性腫瘍におけるIgAおよびSCの免疫組織学的検討

○佐島 三重子, 武田 泰典, 鈴木 鍾美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

唾液腺での従来の免疫グロブリン検索は主としてヒトおよび動物の正常大唾液腺についてなされており、小唾液腺ならびにそれに由来する腫瘍における検索は未だなされていない。そこで私共は正常小唾液腺ならびに小唾液腺より発生した良性腫瘍におけるIgAおよびSCの局在性を酵素抗体法(PAP法)で検索し、唾液腺上皮の腫瘍化に伴うIgAならびにSCの局在性の変化を観察した。

材料は過去12年間に当教室で扱った小唾液腺原発の良性腫瘍31例で、その内訳はpleomorphic adenoma 30例、monomorphic adenoma 1例である。また対照群として腫瘍や粘液嚢胞摘出時に周囲に付着していた形態的には正常と思われた小唾液腺を用いた。

検索方法は材料をそれぞれ4μmのパラフィン切片とし、DAKO社製PAPKITでIgA(α chain and